

昇段記

令和5年2月18日長野会場で七段審査に合格いたしました。多くの先生方からご丁寧なご指導をいただきましたことに心より御礼申し上げます。

60年近く過去のことでありますが、中学3年間は剣道に熱中しました。高校からは山岳部で過ごし、登山関係以外の仕事に就いたことがありません。専門分野は登山です。36年前に新宿剣連西北支部(令和元年に令和会に改組)で剣道を再開しました。剣道修行の要諦を知ることはとても難しいことだと稽古のたびに痛感しております。

七段審査受審は10回目でしたが、なぜ合格したのか自分自身で解明できません。しかしいくつか合点できる箇所はありました。僭越ではございますが書かせていただきます。

- 1 毎朝短時間ですが、ストレッチ、フロントランジ、バックランジ、スクワット、跳躍素振りで筋力と均衡能力の強化をめざしました。
- 2 色褪せしていない剣道着と袴を着用し、面紐は適切な長さに調整し直しました。
- 3 審査会場到着前に長野駅で温かい食事(炭水化物)を摂りました。これまでは握り飯、菓子、飲料水などの行動食を持ち込んでいましたが入場すると受審番号次第で飲食の時間的ゆとりがなく、これではシャリバテ(登山用語で空腹によるパワー不足。グリコーゲン枯渇)になると思いました。
- 4 審査開始前に100ccほど飲水しました。これで気分が落ち着き、発声が楽になりました。
- 5 相手を圧するような気位で臨むことに留意しました。一足一刀の間に入るまでは会場にひびくような発声を心掛けました。これまでは打ちたい、打たれたくない気分が優勢で近間に入りすぎ余計な手数が多く、相手を見るゆとりもなく、むしろ見られていたように思います。相手を見るゆとりを持てれば、肩や腕に余計な力が入らず懐深く構えることができると実感しました。
- 6 初太刀は相手二人とも正面から面を打ちました。面を打ち込んだ後、相手の左体側、自分からは右手側に逸れてしまう悪癖を先生方から注意されておりましたので面の中心へ打ち込み、相手の正面から送り足で前に抜け、残心を示すことを心掛けました。二人目の相手は共に合格したのですが、相手とは気をついにした合気になっていたように思えます。相面も、面に対する出小手も、どちらも双方互角の手ごたえでした。これまでは相手と攻め合い、自分勝手に打ち込み、打ち過ぎていました。同格の相手を圧する気位で、気魄ある剣道ができれば審査時間内に7本か8本打てるかどうかだろうと思いました。打突部位に竹刀を当てるのではなく、打ち切ることに専念しました。
- 7 「残心を残す心と思ふなよ、打った気力をしばしそのまま。」この教えは大切だと痛感しました。

七段の入口に立たせていただきましたので、段位にふさわしい稽古ができるよう、精進してまいります。これからもどうか、ご指導、ご鞭撻たまわりますよう伏してお願い申し上げます。

令和5年3月25日 黒川 恵(さとし)